

災害に関する情報を別居家族に連絡した経験がある人の特性

NTT ドコモ モバイル社会研究所

○水野 一成・近藤 勢津子

Keywords: 連絡, 情報行動, 多変量解析

1. はじめに

災害の可能性がある際、メディアは「該当の地域に家族や友人などがいる方は、電話などで伝えてください」と呼びかけることがあり、オンライン上でも同様の呼びかけ（拡散希望等）が行われることがある。また、過去の災害時には避難行動に繋がった理由として「周辺の環境の変化」と合わせ「人からの声掛け」が挙げられている¹⁾。本研究では、実際に災害情報に接した際に連絡を行った人の割合とその特性について、NTT ドコモ モバイル社会研究所が 2024 年 11 月に実施した調査を基に分析した結果を報告する。なお、情報の送り先は「別居家族」とした。

2. 調査概要

調査時期：2024 年 11 月 調査対象：全国, 15～79 歳男女 調査方法：web 調査

標本抽出法：QUOTA SAMPLING 性別・年齢（10 歳刻み）・都道府県で割付

回答数 10,335（分析対象者は別居家族がいる 7,931）

3. 分析手法・結果

本研究では、災害の可能性がある際に別居家族に連絡を取った経験の有無を従属変数とし、属性、情報への向き合い方、防災・災害、平時のメディア接触頻度を独立変数としてロジスティック回帰分析を行った。有意な独立変数を基に考察を行い、実施した経験のある人の特性を明らかにする。

3-1. 従属変数

別居家族に災害の可能性がある時に、連絡をとった経験がある人は 38.0%であり、これを独立変数とした。ロジスティック回帰分析の結果、表 1 に網掛けした独立変数が、有意（5%未満）に関連していた。

3-2. 独立変数 属性

属性の中では、性別、年代、地域、および別居家族に要支援者がいるかどうかに関して差が見られた。女性および高齢者が災害時に連絡を行った割合が高く、年代に関しては、防災リテラシー（特に意識）と同様な形状（20～40 代が最も低く、70 代が最も高い U 字型）が見られたが、性別に関しては男性が高い防災リテラシーとは異なり、女性が高かった。これは、連絡をするという行為がコミュニケーションの一種として考えられ、コミュニケーションの頻度が女性の方が多いことが関連していると考えられる。

地域別では、「東北、北海道、九州」が 45%を超え、経験者が多い傾向が見られた。これは、年代構成や過去の災害とも関連している可能性がある。また、別居家族に要支援者がいる場合、連絡を行った割合は 50.9%と高かった。

3-3. 独立変数 情報への向き合い方

保高（2018）³⁾ が調査した「情報への向き合い方」の設問を用い、因子分析を行った結果、3 因子⁴⁾ が抽出され、その 3 因子を用いた結果、「探求」の得点が連絡をとった経験がある人で高かった。情報に対し、深く、時間をかけ、他の情報と比較する傾向が見られた。

3-1. 独立変数 防災・災害

防災リテラシー⁵⁾ は「理解」「行動」「備え」の下位概念で構成されるが、全概念で経験がある人の得点が高かった。特に「備え」の差が大きく、それは備えに関する項目の中に「災害時の連絡方法を家族で決めている」があり、平時の備えが災害時にも反映された結果となった。また、災害により被害を受けたり、危機を感じた経験がある人の呼びかけをした経験が高かった。被害を受けたり、危機を感じた経験について、その経験の時期（最も直近）を合わせて見ると、20 年未満は余り変わらない結果であった。

表 1 別居家族に災害の可能性がある時に、連絡をとった経験の有無

独立変数			B	標準誤差	Wald	自由度	有意確率	Exp(B)	EXP(B) の 95% 信頼区間	
									下限	上限
属性	性別	男女	0.25	0.05	24.5	1	<.001	1.29	1.17	1.42
	年代	10歳刻み	0.13	0.02	65.9	1	<.001	1.13	1.10	1.17
	地域	11地域	-0.03	0.01	11.6	1	<.001	0.97	0.95	0.99
	都市規模	4区分	0.02	0.02	1.2	1	0.27	1.02	0.98	1.07
	別居家族に要支援者	有無	-0.64	0.06	116.9	1	<.001	0.53	0.47	0.59
情報へ向き合い方	因子 探求	得点	-0.11	0.03	11.0	1	<.001	0.89	0.84	0.96
	因子 承認	得点	-0.07	0.04	3.6	1	0.06	0.93	0.87	1.00
	因子 限定	得点	0.02	0.03	0.6	1	0.45	1.03	0.96	1.09
防災・災害	防災リテラシー	得点（6～24点）	0.45	0.03	280.5	1	<.001	1.57	1.49	1.66
	被害や危険を感じた	有無	0.84	0.05	258.7	1	<.001	2.33	2.10	2.58
メディア接触頻度	テレビ頻度	4区分	-0.14	0.03	21.4	1	<.001	0.87	0.82	0.92
	ネット利用頻度	4区分	-0.05	0.03	2.8	1	0.09	0.96	0.91	1.01
	新聞購読頻度	4区分	0.02	0.03	0.8	1	0.37	1.02	0.97	1.07
定数			-1.62	0.21	60.5	1	<.001	0.20		

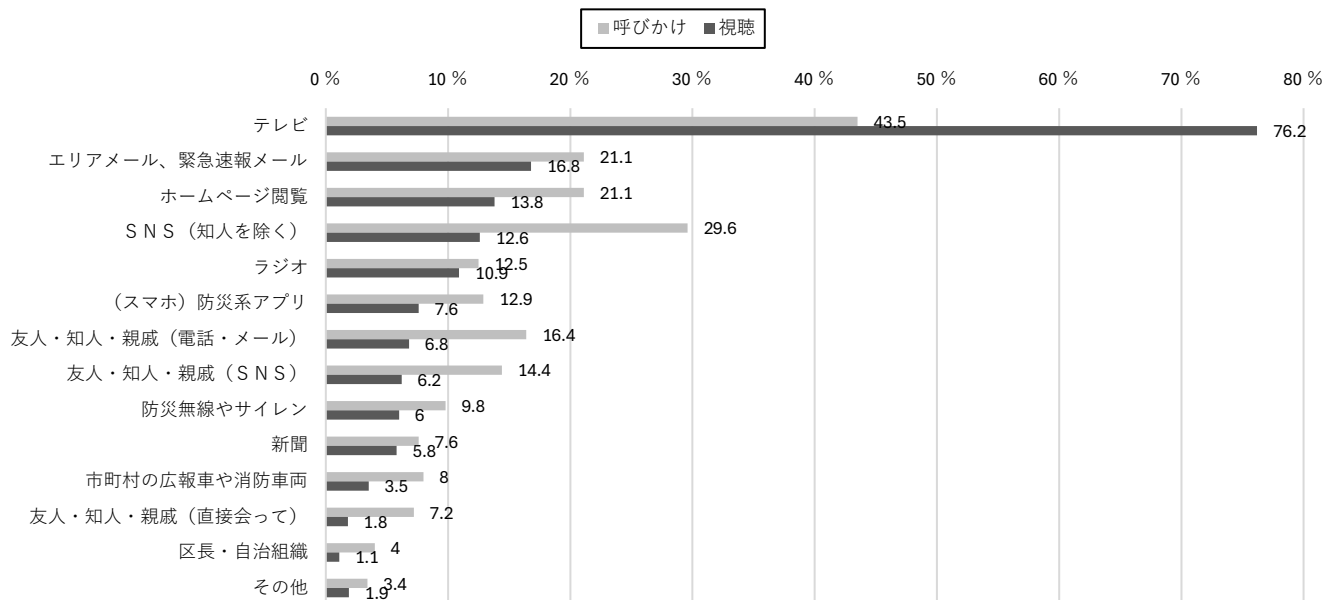


図 1 別居家族に災害の可能性がある時に、連絡をとったきっかけ（MA）

3-4. 独立変数 メディア接触頻度

テレビのみ、別居家族との連絡の有無で差が見られ、平時の接触頻度が多いと経験が多くなっていた。これは、別居家族との連絡のきっかけが図 1 の通り、テレビ視聴或いはテレビから呼びかけが高いことと関連している。

参考文献

- 1) 国土交通省：<https://www.mlit.go.jp/river/sabo/pdf/190124chikubousai.pdf> (2025.07.16)
- 2) モバイル社会研究所：<https://www.moba-ken.jp/whitepaper/wp24/chap2.html> (2025.07.16)
- 3) 保高隆之（2018）「情報過多時代の人々のメディア選択～情報とメディア利用 世論調査の結果から～」『放送研究と調査 68 巻（2018-2019）12 号』, 20-45
- 4) 水野一成・近藤勢津子・吉良文夫（2025）「災害に関する情報を SNS で発信・拡散した経験のある人の特性—情報に関する意思の回答傾向を基に分析—」『日本災害情報学会第 30 回学会大会』
- 5) Matsukawa, A., S. Nagamatsu, R. Ohtsuka, and H. Hayashi (2024) Disaster Resilience Scale for individuals: A fundamental requirement for a disaster-resilient society, International Journal of Disaster Risk Reduction, Vol. 107, 104405.